

立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）

個人研究

2024年度研究成果報告書

研究代表者	所属部局・職名	氏名
	文学部・教授	小澤 実
研究課題	中近世北欧における政治秩序モデルの構築：自然環境・信仰体制・統治構造	
研究期間	2024年度	
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 1,000,000円 / (採択金額) 1,000,000円	
研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフは使用しないこと。)		
当該研究の研究目的を含むこと。 【以下、報告書全体について】他の研究分野の委員が評価することも想定し、わかりやすく記載すること。		
<p>本研究は、14世紀から17世紀という中世後期から近世にかけての北欧の政治秩序の特徴を示す新しいモデルを提供する歴史研究である。</p> <p>高校世界史教科書を含む従来のヒストリオグラフィにおいては、15世紀までの中世と16世紀以降の近世を別個の時代と捉え、中世末を「衰退の時代」とする一方で近世初頭を「グローバル化の時代」とする整理を行ってきた。本研究では、このように別個に考察されてきたこの二つの時代を接続させるとともに、多くの研究で無意識にヨーロッパを代表させていた西欧ではなく、デンマーク・ノルウェー・スウェーデンの三国から構成される北欧を検討対象とし、400年という中期スパンにおける政治秩序の特徴を抽出する。</p> <p>分析に際して具体的に注目するのは、1) 自然環境への対応（とりわけ海域や河川という水系ネットワークの機能と気候変動との関係）、2) 信仰体制の組み込み（宗派論を踏まえた政治と信仰との関係）、3) 統治構造の適合化（カルマル連合体制への注目）である。1) に関しては北海とバルト海に挟まれる海上国家である北欧と自然環境との関係、2) に関しては、宗教改革の結果としてヨーロッパで北ドイツと並びルター派を国教とした北欧の宗教的変容、3) に関しては、一人の君主が三つの国を単独で統治するカルマル連合という特異な体制を採用した北欧の統治構造を、近年の研究動向の整理と行政文書の分析を通じて掘り下げる。</p>		

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)
[北欧中世] [グローバル化] [自然環境]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

以下の視点を含めて記載のこと。

- ・当該研究は何をどこまで明らかにできたのか (できなかったのか)。
- ・何をもって研究成果 (経過) を達成できた (できなかった) と考えられるのか
自身が設定した研究目的・目標に照らして、その根拠がわかるよう記載のこと。
- ・どのような点において、当該研究分野の学術研究推進の高度化に寄与できたのか。

当初設定した3つの研究目的にそい、具体的にどのような調査を行い、何をどこまで明らかにしたのか、について述べる。

- 1) 自然環境への対応 地図から容易に推測できるように、北欧3国は、北海とバルト海に挟まれ、さらにその領土が北大西洋のグリーンランドにまで広がる極めて特殊な歴史空間を保持している。8—11世紀のヴァイキングの時代以来、北欧諸国は、スカンディナヴィア半島と島嶼からなる空間を効率的に支配し利用するために、船舶技術を発達させ、沿岸部に拠点となる都市を建設することで、線と線とを結ぶ支配を行ってきた。そのような支配を支えていたのが、農業のみに依拠しない、牧畜業、漁業、林業、そしてそれらのリソースを用いた手工業などを組み合わせた生産システムであり、他方で北極圏からユーラシア西部に至るまでネットワークを広げた流通システムであった。しかしこうした生産と流通のシステムは、14世紀におけるペストの流行で人口が激減することにより、大きな変化を迫られた。本研究では、壊滅的な打撃を受けた14世紀以降の北欧の経済状況を、自然環境の変化と社会のレジリエンスという観点から検討し、一旦崩壊した経済システムがどのようにして16世紀以降に回復していったのかを検討したい。

以上の問題設定については、次の文献を検討した。

諫早庸一「14世紀の危機」の語り方—ヨーロッパ到来以前の黒死病『思想』1200 (2024) : 9-32 頁

Bavel, Bas van, et al. Disasters and History. The Vulnerability and Resilience of Past Societies (Cambridge, 2020)

Izdebski, Adam, et al. (eds.), Perspectives on Public Policy in Societal- Environmental Crises, Risk, Systems and Decisions (Berlin, 2022)

これらの検討から理解されたのは、自然環境と国家の関係を論じるためには、北欧だけに目を向けいては絶対に理解できない、ということである。自然現象は、局地的に現れるものであったとしても、グローバルな気候や天候の変化の中で理解されるべきものである。そうであるとすれば、北欧3国もまた、北ヨーロッパさらにはユーラシア西部も含めたグローバルな動きの中で位置づけられるべきものであることが理解された。

- 2) 新信仰の導入 1517年にルターが95ヶ条の提題を提示して以降、ヨーロッパは宗教改革の時代に入ったが、その結果として国家としてルター派を受容したのは北ドイツと北欧諸国のみである。そういった意味で、北欧は、最も極端な形で宗教改革を「成功」させた地域である。ルター派教会は国王と緊密な関係を結び、国教とすることに成功した。その結果としてスウェーデンは国内のカトリック施設を破壊しフィンランドにもルター派を拡大される一方、デンマークは、同君連合であったノルウェーやその貢納地であったアイスランドに至るまで聖職者を派遣し暴力的にカトリックを排除した。しかしこのようなプロセスについては、現地北欧語の研究がほとんどであり、英語ですら全貌を掴むのは困難である。ここでは王権と教会との関係に重心を置きつつ、どのような手段で短期間にカトリックをルター派に置き換えたのか、その戦略を検討したい。

以上の問題設定については、次の文献を検討した。

Neil Price, The Viking Way. Magic and Mind in Late Iron Age Scandinavia. Oxbow, 2019.

本書では、ヴァイキング時代における魔術と人間のメンタリティの関係が詳述されている。本研究と対象とする時期が異なるが、本書は、人間と信仰という極めて大きな問題設定に対して、人間の自然に対する認知や理解のあり方を問題にすべきことを主張している。これは、カトリックからプロテスタントに移行した北欧尾においても十分に適用可能である。従来、プロテスタントといえば聖職者らの文言ばかりが分析対象となっていたが、そこに、自然に対する人間の畏怖や憧れを盛り込むことで、より現実に近い宗教活動や行動を再現できることを確信した。

研究成果の概要 (つづき)

- 3) 統治構造の適合化 よく知られているように、後継者の問題から、1397年にデンマーク王妃であったマルグレーテが実質的な君主となることで、北欧三国を単一の君主が統治するカルマル連合(デンマーク・ノルウェー・スウェーデンの同君連合)が成立した。この体制は、スウェーデンが離脱する1523年まで続いた。実はこの1世紀の間に、デンマークはその政治的メリットを最大限に活かし、ノルウェーやスウェーデンに対して商人や役人を送り込むことで、デンマーク色の強い統治構造を築こうとしていた。加えてこのような統治構造は、中世後期以降の北欧周辺諸国の変動の中で理解する必要もある。宗教改革で体制が大幅に変更することになった北ドイツは言うまでもなく、北欧と同じく連合体制をとったポーランド＝リトアニア連合王国、14世紀に台頭したモスクワ大公国、ドイツ騎士修道院国家、そして議会と軍隊をもつ商人集団ハンザなどの動向は、カルマル連合からルター一派国家体制へと移行する北欧の動きと並行している。この並行関係を整理し、その絡み合いと北欧内部の統治構造の変化を検討したい。

以上の問題設定については、次の文献を検討した。

Kirsi Salonen, and Kurt Villads Jensen, Scandinavia in the Middle Ages 900-1550: Between Two Oceans. London, 2023.

上記研究は、最新の北欧中世史概説であり、副題からもわかるように、北海とバルト海に挟まれた空間として、それを取り囲む諸国家や諸集団との絡みの中で北欧中世国家の生成を論じている。そう言った点においては、まさに、当初の問題設定に答える内容を持つ研究であった。1397年から1521年まで続いたカルマル連合は、従来、デンマークとスウェーデンとの対立の中で説明されることがほとんどであったが、この研究では、私と同様に、教皇庁も含めた諸権力との交渉という要素を従来のヒストリオグラフィーの中に持ち込み、より複雑な政治ゲームの中でカルマル連合が解体され、初期近代国家へと移行することが後づけられた。

以上、当初設定した3つの論点についての見解を簡潔にまとめた。それらから了解されるように、この一年の研究においては、14から17世紀のうち、14から15世紀という中世に関するところの検討は進んだが、その後の初期近代に関する検討が不十分である。研究費を用いて文献を収集することはある程度できたが、その読解と位置付けがまだ、ということである。

ただその上で、本研究を軸に、以下の4点を実現することができた。

第1に、『スウェーデンを知るための64章』に、今回の成果を反映した原稿を3本寄稿したことである。中世スウェーデンの展開に、新しい理解を持ち込んだ、と考えている。

第2に、私が編集委員長を務めた『西洋中世文化事典』(丸善出版)の刊行である。本書は西洋中世学会という学会のメンバーをベースに編まれた、全16章、執筆者200人以上の事典であるが、目次や執筆者の決定権の一部を担っていたのは私であり、本研究で得られたパースペクティブと成果を反映することができた。今後20年は、日本で西洋中世に関心のあるものにとって不可欠の手引きとなる。

第3に、『西洋中世研究』16号において、「危機を前にした人間」という特集を組んだことである。これは2022年に本学で開催されたシンポジウムに基づく特集であり、海外メンバーも含む歴史・美術・思想・文学といった学祭的メンバーが、5世紀から15世紀という1000年にわたる自然と人間との関係を論じたものである。私は編集と総論を担当したが、シンポジウム開催時には想定していなかった本研究での成果を十分に反映した上で、執筆を行なった。

第4に、エディンバラ大学で、本研究を盛り込んだレクチャーを行なったことである。現地研究者と討論を行い、今後の研究協力体制を築くことができた。以下に述べるように、このレクチャーは、それ自体が今回の研究の成果報告であると同時に、次年度以降の科研にもつながる内容を持っている。

※この(様式2)に記入の、成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

村井 誠人編、明石書店、『スウェーデンを知るための64章【第2版】(エリア・スタディーズ)』2024年

小澤分担執筆:

- 「12章: スウェーデン・ヴァイキングと東方: ユーラシア西部に広がるスウェーデン」(90-94頁)
- 「13章: 総合芸術としてのルーン石碑: ヴァイキングの美術」(95-99頁)
- 「16章: 北方のルネサンス: オーラウス・マグヌスの著述活動」(110-114頁)

西洋中世学会編、丸善出版、『西洋中世文化事典』2024年

小澤分担執筆

- 「刊行にあたって」(i-ii頁)
- 「海」(16-17頁)
- 「一神教(アブラハム宗教)と暦」(316-319頁)
- 「政治思想と中世」(570-571頁); 「ツーリズムと中世」(574-575頁)
- 「展覧会とカタログの中の中世」(584-585頁)
- 「中世とグローバルヒストリー」(600-601頁)

「特集: 危機を前にした人間: 西洋中世における環境・災害・心性」(『西洋中世研究』16(2024): 2-108頁)

- 1) 小澤実「序論」
- 2) アダム・タカハシ「脆弱な主体——アウグスティヌス『神の国』における多孔的自己」
- 3) 唐澤一友「アングロ・サクソン時代の危機管理—古英語の wisdom poetry を手掛かりに—」
- 4) ヨハネス・プライザー=カペラー「紀元千年転換期におけるグローバルな終末? ビザンツ世界と日本における10-11世紀の気候変動、天体现象、社会的・政治的動乱」(小澤実訳)
- 5) 後藤里菜「女性と〈身体〉という危機—12世紀の敬虔な女性、マーキエイトのクリスティーナ(1096頃-1155頃)を題材に—」
- 6) ブルース・キャンベル「グローバル気候—13世紀半ばのインドネシア・サマラス巨大噴火とイングランド食糧危機—」(内川勇太訳)
- 7) 今井澄子「疫病と美術—14・15世紀フランスとネーデルラントの物語表現を中心に—」

Minoru Ozawa, Outside Cnut's imperium?: Scotland and Sweden in the early eleventh century. Medieval History Seminar at the University of Edinburgh 2025年3月18日